



LGBTQ+ の健康レポート

誰にとっても心地よい医療を実装するために



評者 片岡 仁美 京都大学医学教育・国際化推進センター副センター長

◆ 世の中が変わる以前からの丹念な科学的データの集積

歴史に残る1冊である、ということをまず述べたい。歴史が動く時がある。その渦中に居る時、たった数年間で世の中が変わった、とわれわれは実感する。しかし、その動きの速さに流されながら「世の中は変わった」と、わかったように納得してはいないだろうか。

本書はまさにLGBTQ+について世の中が大きく変わっていくさなかに出版されたが、著者による科学的な検証の端緒は27年前にさかのぼる。精緻で科学的な視点で丹念にデータを集積し、経時的にそれを分析した結果の重さは、潮目が大きく変わる時期においてその価値は一層大きい。

そして、科学的、歴史的な価値のみならず、私は著者の一貫した考え方に非常に感銘を受ける。それは「社会的に可視化困難であるとは、つまり存在そのものが見えにくいことを意味するが、だからといって社会的に存在していない訳では決してない。(中略)存在が可視化されないことによっていつまでも現状が把握されず、その結果としてニーズがあるにもかかわらず公の施策の対象となりにくいという現実である」(「はじめに」)という文章に端的に表れている。見えにくいからではない。見えにくいから見なくてよいのではない。その信念に触れ、特に医療にかかわるものとして背筋を伸ばさざるを得ない。

本書には本来悩みや苦しみをもちて訪れる方の癒しの場であるはずの病院が、LGBTQ+の方にとっては

期待とともに「恐れ」を抱く場であることを多くのデータとともに示している。性的指向は隠すことも話すことも不安が伴う。これらのことが受診を控えることにつながることも少なくなく、無理解による辛い体験はさらに受診への障壁を大きくする。自身も患者の立場になった時、医療従事者の何気ない一言をどんなに深く受け止めてしまうかということを経験した。LGBTQ+の方が受診そのもののハードルを乗り越え、勇気を振り絞って自身の奥深い部分まで開示して、そこで理解が得られなかったら、その失望と苦痛はいかほどだろう。

著者は、「専門職として医療従事者に求められること」という第6章の冒頭で「個々の患者はさまざまな生活実態や背景を持ち、その背景の1つに性的指向やジェンダーアイデンティティを含むセクシュアリティの多様性がある。そしてそれらは、人格形成の根幹をなす基本的人権の1つであることを、医療従事者は認識する必要がある」(p.121)と述べている。患者の背景を理解する必要がある、ということをおたちは意識すべき、したいと思っている。しかし、そのためにはいつも自分が見えているものは十分だろうか、と振り返ることが必要である。患者の大切な部分に触れることの重さを本書を通して改めて問われた気がした。本書に込められた思いをわれわれは深く受け止めたい。

日高 庸晴 著

A5/264頁/2024年/定価2,860円(本体2,600円+税10%) / ISBN978-4-260-05616-8 / 医学書院刊